

近代以降における評価的感情を表わすヤルの展開

豊田 圭子

A Study of Development of the Japanese Verb “Yaru” after the Modern Era—A Historical Change in its Affective Expressions of Evaluation

Keiko, TOYODA

1. はじめに

現代語の動詞ヤルには、次のような例がある。

- (1) (授業が急に休講になったとき)
「やった！ 今日は休みになった！」

上記の例は「授業が休講になる」という事態に対して自分の感情をヤル（ヤッタ）で表現していると考えられる。

(1) は話者自身からその事態に対して「休講のために何らかの努力をする」といったような働きかけがあったわけではない。しかし (2) のように目標達成など、話者自身の働きかけによってその事態を起こした結果に用いられる場合もある。

- (2) (受験生が合格発表の日に)
「やった！ 合格したぞ！」

「合格する」にはそれに相当する努力が必要であり、話者はその事態を自分の力でもって引き起こしたと考えることができる。よって、(2) の場合は話者の事態に対する働きかけがあるものと考えることができる。

こうしたある種の感情を表わすヤルは、自分自身のだけでなく、他者に用いる場合もある。

- (3) (友人二人で対戦式のゲームをしているとき)
「お前、やるな。」
「練習したからな。」

上述のように、話者の事態に対しての働きかけの有無がある。同様に他者に用いる場合にも、事態への働きかけの有無があると思われる^{注1}。

以上のヤルで表わされる感情は歓喜であったり、称賛であったりと、話者の評価的な感情であると考えられる。本稿では、「評価的な感情を表わす」用法として定義し、この用法について考察したい。

2. 本稿の目的

ヤルは、上代から用いられている。用例 (4) のように、上代には「～ニ／へ ～ヲ ヤル」「～ヲ ヤル」のような文型で主に〈対象の移動〉を表していた。

- (4) a 我が背子を 太和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に
我が立ち濡れし (万葉集・巻 2・105)

- b 心には 千重にしくしく 思へども 使ひを遣ら
む すべの知らなく (万葉集・巻 11・2552)

その用法は大きな流れで言えば現代語にも受け継がれていると言える^{注2}。しかし、近世後期頃になると、「～ヲ ヤル」の補語に動作名詞をとり、「～をする」という意味でも用いられるようになった。〈行為をする〉用法である。

- (5) 北八「ソリヤしれやせん。桑名のわたしでも、此人が船の中で小便して、太さはぎをやりやした。
(東海道中膝栗毛 六篇上 1807)

ヤルは〈対象の移動〉を表わす用法から〈行為〉を表わす用法、というように意味・用法を展開させてきたと考えられる。形式に着目してみると、(4) (5) のように、基本的にはヲ格やニ格・ヘ格などで示される補語が必要になることが共通している。

しかし、「はじめに」で取り上げた評価的感情を表わすヤルについては、多くの場合、補語を必要としない^{注3}。

そこで、本稿では、①補語を必要としない評価的感情を表わすヤルの出現時期、②出現後の用法の展開を明らかにすることを目的とする。

3. 先行研究

3.1. 辞書の記述

まずは、辞書の記述から見ていきたい。
『明鏡国語辞典』(第二版)には、以下のように記述されている。

- ⑨ある動作・行為をする。
語法「やった、合格だ／やったね！」など、遂行された行為を称賛して自動詞的にも使う。

また、『新明解国語辞典』(第七版)には「運用」の項目に、次のような記述がある。

- 「やった、これで完成だ」などと、必ずしも意図したとおりになるとは思っていなかったことが、(意外にも) うまくいったことに対する驚きや喜びの気持を、感動詞的に表わすのに用いられる。

以上の記述で分かるとおり、現代語の辞書類においては「自動詞的」「感動詞的」と解釈されているようである。

3.2. 研究論文による記述

中本正智(1986)は、「「やる」は意志的にある事を行うという意味をもつ語であるとすれば、歓声をあげるときにシタではしまらない」と述べる。「例えば合格発表のときなど、一年間、努力してきた受験勉強は苦難に満ちてはいるが、そこには強い意志が働いてきたのであり、その総仕上げの結果がヤッタの中に込められている」としている。

星野恵子(1998)でもスルとヤルが置き換えられない場合の例として、ヤル固有の用法「やった!」を挙げているがその意味用法については述べられていない。

中本(1986)で示されている「強い意志」に関しては首肯できる部分もあるが、強い意志を持って努力してきた総仕上げにヤッタが用いられるというのには、例外があるため、些か強引なように思われる。例えば先ほど示した(1)の例は話者の努力などは含まれず、その事態に対しての話者自身の働きかけ(意志)はないと考えてよい。よって、「強い意志」だけでは説明できないものと考えられる。以上のような例外も含んだ考察が必要となろう。

4. 用例と考察

4.1. 近世における例

今回、考察対象としているのは近代以降に出現した用例であるが、ヤルの用法の流れを見るため、近世期の例も一つあげておく。

- (6) 新内ぶし「けふはとりわけいろ／＼と、いふ事きく事たんとある。その約束で今朝はやうツ。そばにゐる男「エ、畜生めエ。新内だナ。こてへられねへ。鶴吉婆さんが出たやうだ」「あの婆さんはうまくやるゼナア」「あれは鶴賀新内の元祖家元だ」とよ
(浮世風呂 4編 巻之下 男湯之巻 1813)

(6)の例は話者が他人(鶴吉婆さん)の演技の評価を下しているところから、話者の評価的感情を表わす例のように一見思われる。この時期、ヤルは「芸能事」に関する名詞とともに用いられることが多々あった。「演技」の場面と考えると、(6)の例も「芸能事」に関するものと見てよいであろう。近世中期から後期にかけて「芸能事」や「問題事」を対象とするヤルが多く見られた^{注4}。

以上のような近世での用法を考えると、(6)は、評価的感情を表わす用法である、とまでは言えなさそうである。当時のヤルは「問題事」などを対象とし、〈行為をする〉用法を取得し始めた頃と考えられる。「ウマクヤル」という形式で評価的な判断を表わす例が出現しているが、やはり「芸能事を行う」あるいは「演じる」という意味合いが強いように感じられる。その「行い方」が「うまく」と他人に評されていると考えられよう。

しかしながら、「他者を評価する」という用法は、近代以降に出現した評価的感情を表わすヤルに影響していくと思われる。

用例を見ていくと、近代の用例においては評価的な感情を表すヤルの場合、「ウマクヤル/ヤッタ」「ヨクヤル/ヤ

ッタ」などの形式となることが多いことが分かった。これらの形式は上記のように「行い方」が「うまい」と他人に評されている用法と考えられる。まずは近代以降のそれぞれの形式と例を見ていきたい。

4.2. 明治期に出現する例

〈タ形：対他者〉

- (7)「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って椽の下へ這い込んだら御めえ大きなたちの野郎が面喰って飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生って気で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまく遣ったね」と喝采してやる。

(夏目漱石「吾輩は猫である」1905・1906〈明治38・39〉)

(7)の例は「いたちを泥溝のなかへ追い込む」という動作に対して「うまく遣った」と評価を下している。しかし、用例中の「遣る」が「追い込む」動作自体を指している可能性も捨てきれない。すなわち「うまく(いたちを)追い込んだ」という意で用いられているとも考えられる。明治初期の例であるが、上記の可能性を鑑みればこの時点ではまだヤルの用法として評価的感情を表すものがある、とは言い難い。

- (8)「あれで、森彦も自分の事業の方の話は何事もしない男ですが——」とお種はお倉の話を遮った。
「貴方の方に、郷里に、自分の旅舎じゃ……どうしてナカナカ骨が折れる。考えてみると、よく彼もやったものです」
「真実に、森彦さんには御気の毒で」
(島崎藤村「家」1910・1911〈明治43・44〉)

〈ル形：対他者〉

- (9)自分で作った日露戦争前後の相場表だの、名古屋から取寄せている新聞だのを、叔父に出して見せて、「叔父さんからも御話がよく有りますから、今度は私もウンと研究して見ます。下手に周章でない積りです。この通り、彼方の株の高低にも毎日注意を払っています……「どうして、橋本は行るぜ、彼はナカナカの者だぜ」——そう言って、是方の連中などは皆な私に眼を着けてる……」

(島崎藤村「家」1910—1911〈明治43・44〉)

(8)は「彼(森彦)」が「行ったこと」に対して「ヨクヤッタ」と評価を下している。(9)は「行ったこと」ではなく「橋本」という人物に対して「行る」「なかなかの者だ」と評価を下している。他者に対してル形で用いられる場合は物事ではなく、その人物が高い能力を有しているということを表していると考えられる。

明治期において「ヨクヤッタ(対他者)」「人ハ+ヤル(対他者)」の例が見られる。近世期の用例(6)と同様に他者に対する話者の評価が下されている。評価的感情を表わすヤルは、出現時は他者に対する言い方として成立したもの

と考えられる。

(岩野泡鳴「憑き物」1920〈大正 9〉)

4.3. 大正期に出現する例

〈タ形：対他者〉

(10) 柿沼三次郎！おやッと私は目を瞠った。そして彼の族籍地を見直した。福島県とあった。年齢を見直した。それにはどうしたものか、二十五歳としてあった。年齢は違うが、どうも出身地と云い、三次郎と云う特殊の名と云い、同名異人とは思われなかった。学科目も、経済学生としてあった。私はスッと背中が寒くなる気がした。若し彼だとすれば、あの万年大学生の五百木だとすれば！やったな！と私は思った。何だか異常な感動が、私の胸を走った。

(久米正雄「学生時代」1918〈大正 7〉)

(11) 「北海道長官を待遇がいかにと叱りつけたのは、つい、こないだのことであつたが、なア。」

「敵も十分うまくやつたものだ。」

「そりや、もう、前から計画してをつたのだらうから、なア。」
(岩野泡鳴「憑き物」1920〈大正 9〉)

(10) は「五百木」という人物に対して話者が「やったな」と評価している場面である。「五百木」は学生の危険思想の研究、運動化を起こした一団の一人として起訴され、新聞に載ることになる。その新聞を読んだ主人公が「やったな」と評している。必ずしも、いわゆる「良いこと」ではないときもあるが「大したことを実行した」という点においてヤルを用い、評価していることには変わらない。

(11) の形式を見ると「ウマクヤッタ」である。この形式では、対象となる人物がテキスト中で示されることも多く、誰に対しての評価なのか明示されている。話者の評価的感情が表されるが、それは話者から他人に対しての評価である。

評価的感情が表されるヤルは現代語においては (1) (2)

(3) のように補語をとらず、副詞もとらない単独のヤル／ヤッタで用いられることが多々ある。しかしながら、この頃の例を見てみると評価的な判断・感情が表される例においては「ウマクヤル／ヤッタ」、「ヨクヤル／ヤッタ」などの形容詞の副詞化した語を伴って用いられる例が多く見られる。

また、これまで見てきた例において、ヤッタが意味しているのは「物事・事態を主体（動作主）の思いどおりに進めた」ことである。そのことを話者が「うまく進めた」と評価していると考えられる。

副詞を伴う形式には、用例 (12) (13) のようにル形も存する。

〈ル形：対自己〉

(12) 「無論、僕の為めにやつて呉れることなら、僕はことわりもしないが――」

「君は知らんつもりでをつたらえい、さ。僕等がうまくやるから――」

こんなことを話してから、鶴次郎は再び最初のことを云つて誘つたが、義雄は応じなかった。

(13) 「いろいろ考えちアみたんだが、やっぱりねたは活動写真じゃね、ほかにどうも、わしでやれそうなおことがないもの。でも、その人が活動が嫌いだって云うんじゃから……」

「嫌いったって、めったに見に行かないってだけのことで、何も、話を聞くのも可厭だってほど嫌いなわけじアないよ、何か面白い喜劇の筋でも一つ二つ話して聞かせれア、そいつは面白そうだが、今どっかでやってますか、とかなんとか、すぐのって来そうなんだから……」

「そんなことならお手のもんじゃよ。活動で構わないとなりゃア、あとは万事わしがうまくやるよ」

(里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正 11-12〉)

(12) (13) はいずれも「僕等」「わし」というヤルの動作主が示される。これらは文型中に目的語を明示してはいないが、「うまく物事を進める」ことを表している。とすると、これらは「評価的な感情」という用法と「物事を進める」という用法の両義的なものと考えられるべきかもしれない。

4.4 昭和期に出現する例

〈ル形：対他者〉

(14) 「そう言えば、今度は飯田でもよっぽど平田の御門人に御礼を言ってい。君達のお仲間もなかなかやる」
「平田門人もいくらか寿平次さんに認められた訳ですかね」

(島崎藤村「夜明け前」1929-1935〈昭和 4-10〉)

(15) 「ヒットラーか」と、徹吉は暗闇の中で、心の片隅で呟いた。

「あの男はなかなかやる。ドイツも見事に復興したものだ」
(北杜夫「楡家の人びと」1963〈昭和 38〉)

(16) 「腰抜けや思うとつたら、ちょっとちがうぜ。今度の長官、案外やるやないか」

というわけで、このころから次第に、山本五十六に対する認識を改めて行ったようである。

(阿川弘之「山本五十六」1977〈昭和 52〉)

〈タ形：対他者〉

(17) 「君、うまいことやったな」

課長は部屋にもどって来るやいなや彼の肩をたたいて横に坐りこんだ。

(開高健「パニック」1957〈昭和 32〉)

(14) (15) (17) の例は明治期・大正期に出現した文型であり、昭和期に入っても引き続き用いられている。他者に対して話者が評価をする形式として安定した文型と言えそうである。(16) は、タ形で他者に用いるという点で (14) (15) と共通するが、「案外ヤル」という話者の「意外である」という感情が明示されている。

また、「なかなかヤル」という形式ではなく、ヤル単独で

他者に対して用いる形式（用例（3）のような形式）は、用例（18）に見えたとおり、昭和期以降に出現するようである。

（18）クラブハウスから駐車場へ戻る途中でエディが言った。

「ジュン、やるね」

「スタミナは心配ないっていつてでしょ、エディさん」（沢木耕太郎「一瞬の夏」1981〈昭和 56〉）

（19）純子は内心手を打って喜んだ。伸子さん、やるじゃないの！

みんな、内心では気になっていながら、口に出して訊くことができなかった。

（赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和 57〉）

他者に対してル形で用いられるとき、「なかなかヤル」「よくヤル」などの形式も含めて「話者が思っていたよりも意外に」というニュアンスを含むように感じられる。辞書の記述でもあったように、話者の「意外性」が示される

〈タ形：対自己〉

（20）合格と知ってとび上る者、大声をあげて叫び駆け出す者がいる。「やったやった」と手を叩き「お医者」と歓声をあげる者がいる。

（渡辺淳一「花埋み」1970〈昭和 45〉）

（21）ぼくはもうこのへんで失礼します、ということを告げた。「そうですか。では頑張って下さい」と、彼女は言った。「ええ。あなたもね」と、ぼくは言った。

（中略）原田瑞枝が、おそらくあまりゆっくり電話で話をしていられないような状況の中で、「何の用件ですか？」と一度も聞こうとしなかったことが、ぼくはとにかく嬉しかったのだ。「よおし、やったぞ」と、ぼくはヘンテコな声を出しながらそう思った。

（椎名誠「新橋烏森口青春篇」1985-1987〈昭和 60-62〉）

（22）ひとしきりの最終質問の出尽くした後で、軽く頭を下げると、全員が、それまでの誰の講演の後でもみられなかったほどの盛大な拍手をしてくれた。

私は、「やった」という嬉しさと、やっとこれで一人前に扱ってくれるだろう、との思いに浸りながら、上気した顔のまま、うす暗い廊下に出た。

（藤原正彦「若き数学者のアメリカ」1977〈昭和 52〉）

（20）から（22）では、話者にとって困難な事を達成したときに用いられている。つまり話者の事態に対する働きかけがあると言える。今まで見てきた例のほとんどは他者に対してであろうが、自己に対してであろうが、事態への働きかけがあった。つまり、動作主の努力なしで事態の実現はあり得なかったと考えられる。

しかし、1980 年代には、次の用例（23）のように話者自身が困難な事を達成する場合以外にも用いられるようになっている。

（23）「おい！やったぞ！」

荒井が突然大声を上げて飛び出して来た。

「な、何よ、大声出して！」

気でも狂ったのか、と思った。

「見ろ！当たったんだ！宝くじが当たった！この間、会社の奴から売りつけられたのが当たったんだ！」

（赤川次郎「女社長に乾杯！」1982〈昭和 57〉）

（24）（アルバイトが急に休みになって）「やった！今日、休みになった！」

（23）（24）は話者自身が困難な事を達成したことを表わすのではない。（23）は「宝くじが当たる」という確率が低いことに対して、（24）は「急に休みになる」ということに対して、話者の歓喜だけが表わされていると思われる。

この用法では、何かの事態が実現したことについて話者の感情が表わされるのでタ形のみ現れる。

以上に見られた用例を年代別と形式に分けてまとめたものが末尾に付した〈表 1〉である。

5. ヤルの用法展開

以上の評価的な感情を表すヤルと、近世までにヤルが有していた用法との関連を考えてみたいと思う。

第 1 節で述べたとおり、上代におけるヤルは用例（4）のように「～ニ／へ ～ヲ ヤル」「～ヲ ヤル」という文型で〈対象の移動〉を表していたと考えられる。時代が進むにつれ、近世期には用例（5）のように「～ヲ ヤル」文型でスルに似た用法を取得する。スルに似た用法を取得する前には、〈主体の思いどおりに態度・能力を表出する〉用法があった。以下に例を挙げておく。

（25）a しばらく耳にあかず、あまたの男の中を押しわけ、団扇かざして詠めけるに、闇にても人はかしこく、老いたる姿をかづかず、白き帷子に黒き帯のむすびめを当風にあちはやれども

（好色五人女 巻二 1686）

b 「ハテつがもない。そんな事でほらるゝ物か。これがきほひの表道具。尤いたさは、いたかつたが、畏りて居るより、はるかに堪へよい。なんだかしらぬが、おらは半時、小笠原をやると、むかふずねが碎けるやうで、いま／＼しぬ」。

（当世下談義 巻三 1752）

c 京「イヤゑどのお客に何ぞ、所望しよじやないかい 弥次「ソリヤもふ、琴三弦鼓弓、なんでもちつとヅゝはやりやすが、こゝにやアそんなものはねへからはじまらねへ

（東海道中膝栗毛 六篇上 1807）

（25a）にも見られる「あじをやる」は、堀口和吉（1984）において「ハナヤカナモノヲ、自ラノ外面ニ表ス」意であるとされる。『日国』には「①うまい事をする。うまくとりさばく。②気のきいたことをする。なまいきな事をする。」と記述されており、動作主が意志的に事を行うことが示さ

れる。(10b) のヲ格名詞「小笠原」は「小笠原流の行儀作法」であり、主体の能力を必要とする芸能事と考えられよう。(10c) におけるヤルの対象「琴三弦鼓弓」も同様に主体の能力を必要とする。芸能事に用いられる場合、「その能力を表出する」と考えられる。また、それにも (10a) と同様に動作主の意志が関わっている。よって、用例 (10) の用法をまとめて〈主体の思いどおりに態度・能力を表出する〉用法としている。

〈主体の態度・能力表出〉用法に関して詳しくは別稿に譲るが、ヤルには「思いどおりに事を行う」用法があったことに着目したい。先に挙げた用例 (6) の「うまく演技をする」という場面でのヤルは、他者（観客）による主体（演者である鶴吉婆さん）の「思いどおりに演技の能力を表出（発揮）することの評価」とも考えられる。以上のように近世期にはヤルがさまざまな用法を持つようになる。

ここで、近代以降の評価的な感情を表すヤルを見てみる。明治期に出現した「他者に対しての評価」は「物事を遂行したこと」に対しての評価であることが分かる。また〈表 1〉を見ると、大正期には自己に対して「ウマクヤル」という形式が出現することが分かる。それまで他者に対して用いられていた用法が、「うまく物事を遂行する」意で自己に用いることが可能となった。さらに〈表 1〉で形式の変化をみると、副詞を伴ったヤル／ヤッタを経て、単独のヤル／ヤッタが出現していることが分かる。単独のヤッタを見ると主体の事態への働きかけがない場合も見られる。これは、困難な事をやり遂げた→歓喜、という用法が歓喜のみを表す用法として確立していったと考えられる。

6. 結論

評価的感情を表わすヤルは、まず、明治期に「うまくヤッタ」「よくヤッタ」という〈対他者：タ形〉が出現している。次に大正期に〈対他者：ル形〉が出現する。このような副詞を伴った形式を経て単独のヤル／ヤッタが出現した。

さらに〈対自己：タ形〉が大正期に出現する。話者が考える困難な事を達成した場合に用いられる。実現済の事態なので使用されるのはタ形のみである。この用法は時代が進むにつれて困難な事を達成する場合だけでなく、ただ話者が歓喜するだけの場合にも用いられるようになった。こうして、現代語の歓喜の表現「ヤッタ！」が出現した。

以上の用法を見ると、他者への評価から自己の評価、という流れが確認できる。

用法の変遷において、近世後期から近代にかけてのヤルは、「通常ではないこと」「一生懸命に行うこと」「困難なこと」を対象にしていた。主体が「通常ではないこと」「困難なこと」を行うことに対して、その他の者が「うまくヤル／ヤッタ」と評価する用法が出現したと思われる。その評価対象が他者だけでなく話者自身も可能となった。以上のような変遷で、現代語の用例 (1) ～ (3) のような評価的感情を表わすヤルが生じたのだと考えられる。

(注)

1 「練習」をして能力を手に入れた場合と、元来持っている才能に対して使う場合がある。

2 この他にも細かく用法を展開させていっており、授受の用法など、直接的には用法は現代語と古語は違うが、対象の移動という広い枠組みでいえば同じと考えて良いと思われる。

3 例えば「弟に本をやる」や「野球をやる」は、二格やヲ格によって示される必須補語を有するが、評価的な感情を表す用法はヤル／ヤッタのみでも用いることができ、補語を必要としない。

4 ヤルは 1700 年代で動作名詞を補語にとるようになるが、その補語には「騒動」などの「問題事」という偏りがある。また「ゑど役者」など芸能に関する補語も多く見られる。これについては豊田 (2012) で述べた。

参考文献

- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』 ひつじ書房／秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房／大塚望 (1999) 「「する」と「やる」—生理・病理現象の表現を中心に—」『言語学論叢集』 18／大塚望 (2002) 「「する」と「やる」—非動作性名詞がヲ格に立つ場合—」『日本語科学』 12／大塚望 (2006) 「行為動詞「やる」の俗語性」『日本語日本文学』 16 創価大学日本文学会／大塚壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』 1—3／荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』 3—3／影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房／神田靖子 (1987) 「「する」と「やる」」『縮刷版 日本語教育事典』大修館書店／國弘保明 (2007) 「話し言葉に於ける「する」と「やる」の使われ方の相違について」『拓殖大学日本語紀要』 17／古川俊雄 (1995) 「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要第二部』 44／中本正智 (1986) 「類義語の意味論的研究—やる・する」『日本語研究』 8 東京都立大学国語学研究室／日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』 ひつじ書房／日野資純 (1998) 「両形並存の視点から見た方言と国語史—スルとヤル—」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 汲古書院／星野恵子 (1998) 「そこが知りたい日本語教育何でも相談「やる」と「する」は同じですか？」『月刊日本語』 125 アルク／堀口和吉 (1984) 「動詞「やる」の一考察—「行る」「演る」の誕生—」『山辺道』 28／宮地裕 (1965) 「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』 65／森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店／豊田圭子 (2012) 「動詞「ヤル」の意味・用法の変遷」『日本語学会 2012 年度秋季大会予稿集』／豊田圭子 (2014) 「ヤラレル／ヤラレタの意味用法の史的変遷」『岡大文論稿』 42

参考辞書

- 前田勇編 (1974) 『江戸語大辞典』 講談社／小学館国語辞典編集部 (2002) 『日本国語大辞典第二版』 小学館／北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典第二版』 大修館書店／中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 (1999) 『角川古語大辞典』 五 角川書店／山田忠雄編 (2011) 『新明解国語辞典第七版』 三省堂

(2016 年 11 月 7 日 受理)

〈表 1〉 評価的感情を表わすヤルの形式と用例数

形式 書誌情報			ウ マ ク				ヨ ク								ナ カ ナ カ		単 独			
			ヤ ル		ヤ ッ タ		ヤ ル		ヤ ッ タ		ヤ ッ テ イ ル		ヤ ッ テ イ タ		ヤ ル		ヤ ル		ヤ ッ タ	
西 暦	和 暦	作品名	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己	対 他 者	対 自 己
1905-1906	明治38-39	吾輩は猫である			1															
1906	明治39	破戒					1													
1910-1911	明治43-44	家							1								1			
1918	大正7	学生時代																	1	
1918-1919	大正7-8	新生					1													
1920	大正9	憑き物		1	1															
1922-1923	大正11-12	多情仏心		1																
1928	昭和3	放浪記	1																	
1929-1935	昭和4・昭和10	夜明け前													2					
1937	昭和12	路傍の石	1						1								2		2	
1937	昭和12	路傍の石・付録							3											
1947-1948	昭和22-23	ビルマの竖琴	2																	
1956	昭和31	金閣寺									1									
1957	昭和32	パニック			1														1	
1957	昭和32	巨人と玩具	1																	
1957	昭和32	裸の王様							2											
1957	昭和32	驢馬							1											
1957	昭和32	他人の足	1																	
1957-1958	昭和32-33	点と線							1										2	1
1963	昭和38	さぶ	1										1							
1963	昭和38	楡家の人びと							3	1					3					
1963-1966	昭和38-41	国盗り物語							3						2		6		3	1
1966	昭和41	華岡青洲の妻					1													
1968-1969	昭和43-44	冬の旅					2						1		2		1			
1969	昭和44	孤高の人	1						1										1	
1970	昭和45	花埋み	1																	3
1970	昭和45	ブンとフン							1										1	
1971	昭和46	二十歳の原点													1					
1972-1989	昭和47-平成元	剣客商売							2								1			
1973	昭和48	太郎物語 高校編							1											
1977	昭和52	エディプスの恋人							1											
1977	昭和52	山本五十六	1	1					2								1			
1977	昭和52	若き数学者のアメリカ													1					1
1978	昭和53	人民は弱し、官吏は強し							1											
1978-1979	昭和53-54	新源氏物語							1						1					
1979	昭和54	太郎物語 大学編	1			1			1											1
1981	昭和56	一瞬の夏							4			1					1			
1982	昭和57	女社長に乾杯!	2						3	1	3		1		2		3		1	1
1985-1987	昭和60-62	新橋烏森口青春篇			1															3

※ 表中の数字は用例数を表わす